

用器官を用いた手術も期待ほどに成果があがらず、結局最終的には食道起始部と腸を吻合するその間に頸部の皮膚ロールをおき、長期間を要して全快された方、姑息的ながら胃瘻によりほそぼそ生命をつなぎつつある一方、Co⁶⁰ 治療の効力か、時期的な変化か、まったく閉鎖されて唾液や水が一滴も通過しなかったものが、漸次嚥下されるようになり、自暴自棄的な振舞いもうすらいできた方、また先天性食道閉鎖のため一時的に胃瘻を造設した新生児、次期の手術に備えて 20 日間ほど経過した現在、唾液の吸引に用いるネラトンにまでチュウチュウ吸いつくいじらしさ、生命力維持の旺盛さに何ともいえない驚異を覚えます。また咀嚼したものを吐き出しまとめてそれを胃瘻から注入するなんてと嫌う人、入菌の具合がわるい人など、以前はすり鉢などで何とか工面したものが、今はミキサーで簡単に注入できるということなど、いろいろなケースのなかから、努力した看護の中にも悲喜交々に、それぞれの意義があるわけで、これは臨床分野を受持つ者が必然的に体験談として、

そのなかに織り込むことになり、こうした場合は 2 時間ではちょっとむりではないかと思われます。

開胸して吻合術が行なわれた場合、持続吸引器が胃管カテーテルと胸腔内ドレーンに連結されるわけですが、その吸引力の相違、胸腔内ドレーンに連結した吸引瓶交換時の気密な扱いは、その都度お話することだろうと存じましたがひと言つけ加えました。看護に是非とも必要な外科学の面を質問形式で喚起させていることに合わせて、実際の状況についての問答や処置の適否をそのまま提供してゆけば、なお一層この資料が生きて学生に焼きつけられると思います。もっと体験談を織りこんでほしい、そうした実例から肝心なことの記憶が、という学生のアンケートもプラスになる。

要はせっかくこのように計画立てられた立派な指導案が、学生にどのような意欲を与え、どれだけ把握されたかが問題で、学生側はともかく、教師の側の問題もあるようですし、ともに看護婦らしい看護婦を育成することに微力ながら勉強してゆきたいと思います。(東京通信病院婦長)

編集デスク <33>

今年の夏は中禅寺湖畔に遊ぶ機を得た。湖畔の道路は拡張のさなかで、自動車が通るごとに砂塵を舞いあげ、せっかく東京のスモッグを離れて来たのに、もうもうたる砂塵のなかをくぐりぬける憂鬱さがあった。湖上の清風にしくはなく、道路が完成するまでは湖上の碧緑の水趣が愛されるであろう。

宇都宮女子高校長長安寿夫氏の案内で宇都宮駅から車によったので、日光街道の見事な杉並木を十分にたんのうできた。長安氏はアメリカに数度もわたり、目下日米高校生の交換留学を実施している新しい教育家である。車窓に映る杉並木の太木の凄絶な光景は、まことに何かの文句にあるようにスカッと爽やかに天空を切り、熱心に語られる郷土愛に基づく教育の抱負は次代を担う若い世代に寄せる老教育者の情熱のすさま

じさを端的に物語っていた。老教育者などと言ったら叱られそうな、かしくしたる元気である。

東京人には、東京をおのれの郷土としていつくしみはぐくむ気持ちが薄い。隣りは、いつどこからやって来て、何するものぞといったエトランゼの気持ちが強いからであろう。マンモス都市で、寄り合い所帯の薄っぺ

郷土愛というもの

——長谷川 泉——

らさが、そのまま出ている。東京のおらが郷土感はあるいは外国にでも出てロンドンやパリやニューヨークとでも対比した場合に、おらが東京になるのかもしれない。

そこへゆくと、地方へ出るたびに痛感することだが、おらが郷土の感人は人の肌にしみ込んでいる。愛郷の精神はにじみ出るものとして強く感じられる。つけ焼刃ではない。それ

は、郷土の歴史や地理や風習や、そういった歴史の年輪や人間形成の環境と切っても切りはなせないものとして強く結びついているのである。親炙のないところに愛情はない。

戦後の日本が、民族の歴史を教えることをためらい、おのれの住む国の地理を学ぶことをたなあげにし、そして精神の無国籍者を多く作りあげたことは強く反省されなければならないだろう。くりかえすが、親炙のなく、それを知らず、理解のなくそして主体的に身をすり寄せるよすがのないところに愛情のわくわけはない。

長安氏からは、「郷土の文学」という立派な編纂物を貰った。郷土に関係あり、また郷土出身の人たちの作品が編まれていた。私の専門で言えば中禅寺湖に近い奥白根のあたりに材をとった幸田露伴の名作「対髑髏」などが収められているのに感心した。